

V 学生の受け入れ

1. 学部における学生の受け入れ

A 入学試験の種類

現状と評価

本学では、一般入学試験は、A方式（大学独自の入学試験）、B方式（大学入試センター試験と本学の個別学力試験）、C方式（大学入試センター試験のみ）の3種類である。C方式は、2002年度からの実施である。推薦入学試験は、英文学科の指定校推薦、情報数理科学科の公募制推薦の2種類である。特別入学試験は、外国からの帰国生・在日外国人学校出身者、外国人留学生を対象にした3種類である。編入学試験は、3学科で実施し、2002年度からは、英文学科で社会人入試を実施している。

(1) 一般入学試験

・A方式（大学独自の入学試験）

本学の入学試験で募集人員が最も多い。試験問題は、単なる暗記能力ではなく、基本的な知識を問題に応じて応用・発展させたり、結論を理論的・体系的に記述したりする力を重視する問題となっており、論述式（記述式）問題も多く、受験生が本来持っている能力をじっくり判定しようとするものである。高校の調査書は、特に問題がある場合等に考慮の対象になる程度で、判定のウエイトは、学力試験に置かれている。選択科目に関しては、特定の科目の受験者が有利または不利になることのないよう、科目間の得点の調整が行なわれている。入試問題の作成にあたっては、各教科別に関連学科から選出された出題委員長を中心とした出題委員会が組織され、問題作成、解答作成、検証が、組織的に適切に行なわれている。採点に関しては、出題委員会とは別組織を編成するなどチェック体制が充分機能するような対策をとっている。以上のほか、詳細にわたり入試問題については入試問題対策委員会において十分な検討がなされている。また、毎年、入学試験問題と解説・解答例のデータブックを作成する機会も有効に捉え、問題の精査が行なわれている。

入試当日は実施本部を設置し、入試全般についての諸問題に対応できるよう万全の体制を整えている。受験生の案内誘導等は、最寄り駅に交通案内が立ち案内を行なうと同時に、駅へは地図の配布を依頼するなど協力を依頼している。大学周辺については、混雑時の交通安全等を警察へ依頼するなど受験生の安全を配慮している。大学構内への入構は、受験生と付き添い以外は全面禁止とし、学内を定期的に職員、警備会社が巡回するなど徹底した警備体制をとっている。医務室には、校医、看護婦が待機し病人、けが人への応急措置の体制を整えている。障害者の受験については、大学入試センター試験出願要領に準じ、「受験特別措置申請書」を出願前に提出させ、受験時だけではなく入学後の希望特別措置について慎重に検討し、受験の可否を通知することとし、受験生が安心して受験できるよう入念な準備を行なうようにしている。また、本学の英文学科では、英語の試験に聞き取り問題があるため、当該時

間帯の航空機運行について自衛隊へ協力依頼の文書を提出し、試験中の騒音についても配慮している。

以上の事項は、次に述べる B 方式の個別学力試験についてもほぼ同様である。

学力試験教科と配点、募集人員等は、以下のとおりである。

学科	募集人員	試験科目	配点	時間
国際関係学科	207人	国語:国語Ⅰ、国語Ⅱ	100点	80分
		地理歴史または数学 地歴:日本史B、世界史Bのうちから1科目選択 数学:数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A(1. 数と式)	100点	80分
英文学科	155人	外国語:英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディング、ライティング、 オーラルコミュニケーションA、B、Cに共通する事項	200点	100分
情報数理科学科	65人	数学:数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A(1. 数と式、 3. 数列)、数学B(1. ベクトル、2. 複素数と 複素数平面)、数学C(1. 行列と線形計算、 2. いろいろな曲線)	200点	150分
		外国語:英語Ⅰ、英語Ⅱ	100点	80分

* 英文学科の「外国語:英語」には「書き取り」を含む。

・ B 方式 (大学入試センター試験と本学の個別学力試験)

1998 年度入学試験から国際関係学科、英文学科が、また、1999 年度入学試験からは情報数理科学科が入学定員の一部 (約 1 割) について大学入試センター試験を利用した入学試験を実施している。募集人員を約 1 割にした理由は、他大学で大学入試センター試験を利用した入試での歩留まり率が低いという実例があったためである。選抜方法は、3 学科とも大学入試センター試験と本学の個別学力試験の総合判定によるものである。

個別学力試験の内容について、国際関係学科の小論文は、英語による題材を読んで小論文形式で答える問題で、配点上、小論文の得意な人向きの入試である。入試で小論文を課している理由は、国際関係学科では、英語で書かれた論文を数多く読み、また、卒業論文を書くことが全員に課されることから、論理的に思考し表現する力が要求されるためである。

英文学科の英語は、書き取り、聞き取りを含み、手紙を書かせる問題、4 コマ漫画を読んでその面白さについて英語で答えさせる問題等、受験生が「解いていて楽しい問題だった」とアンケートに答えるほどユニークな問題で、受験生の個々の英語力をじっくりみる問題で、配点上、英語の得意な人向きの入試である。

情報数理科学科の数学は、大問 3 題に 2 時間じっくり取り組ませるという方法で、やはり受験生の考える力をみる問題となっており、配点上、数学の得意な人向きの入試である。

国際関係学科、情報数理科学科の個別学力試験は、本学と地方の 5 会場 (札幌、仙台、名

古屋、大阪、福岡) で実施している。

B方式入試に利用する大学入試センター試験科目と個別学力試験科目は、以下のとおりである。

学 科	募集人員	試 験 科 目	配点	時間
国際関係学科	25人	利用する大学入試センター試験科目 外国語 : 英語 国 語 : 国語Ⅰ・国語Ⅱ 地理歴史 : 世界史B、日本史B、 地理B 公 民 : 現代社会、倫理、 政治・経済 数 学 : 数学Ⅰ・数学A、 数学Ⅱ・数学B } から1科目 個別学力試験 小論文 (英語の理解力を必要とする)	100点 100点 100点 600点	120分
英文学科	25人	利用する大学入試センター試験科目 外国語 : 英語 国 語 : 国語Ⅰ・国語Ⅱ 地理歴史 : 世界史A、世界史B、 日本史A、日本史B、 地理A、地理B 公 民 : 現代社会、倫理、 政治・経済 数 学 : 数学Ⅰ、数学Ⅰ・数学A、 数学Ⅱ、数学Ⅱ・数学B } から1科目 個別学力試験 英 語 : 英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディング、ライティング、オーラル コミュニケーション (A・B・Cに共通する基本事項) (書き取り、聞取を含む)	100点 100点 100点 200点	120分
		利用する大学入試センター試験科目 外国語 : 英語 数 学 : 数学Ⅱ・数学B	100点 100点	

情報数理科学科	10人	国語：国語Ⅰ、国語Ⅰ・国語Ⅱ 地理歴史：世界史A、世界史B、 日本史A、日本史B、 地理A、地理B 公民：現代社会、倫理、 政治・経済 理科：総合理科、 物理ⅠA、物理ⅠB、 生物ⅠA、生物ⅠB、 化学ⅠA、化学ⅠB、 地学ⅠA、地学ⅠB	から1科目	100点	120分
		個別学力試験 数学：数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A（1. 数と式、3. 数列）、数学B（1. ベクトル、2. 複素数と複素数平面）、数学C（1. 行列と線形計算、2. いろいろな曲線）		300点	

・C方式（大学入試センター試験のみ）

2002年度入学試験から、3学科で入学定員の約5%の募集人員を目標に、大学入試センター試験のみで選考する方式を導入した。国際関係学科は、出願書類として「志望理由書」を提出させるが、可否の判断基準にするものではない。本学は、1学年580名と少人数ながら、女子大学としては、数少ない全国区型の大学なので、全国各地の受験生がさらに受験しやすいようにとC方式入試を導入した結果、近年減少傾向にあった関東以外の地域からの出願数が増える結果となった。

C方式入試に利用する大学入試センター試験科目は、以下のとおりである。

学 科	募集人員	利用する大学入試センター試験科目	配点
国際関係学科	8人	外国語：英語	200点
		国語：国語Ⅰ・国語Ⅱ	100点
		地理歴史：世界史B、日本史B、 地理B 公民：現代社会、倫理、 政治・経済	から1科目 100点
		数学：数学Ⅰ・数学A、 数学Ⅱ・数学B	から1科目 100点

英文学科	10人	外国語：英語 国語：国語Ⅰ・国語Ⅱ 地理歴史：世界史A、世界史B、 日本史A、日本史B、 地理A、地理B 公民：現代社会、倫理、 政治・経済 数学：数学Ⅰ、数学Ⅰ・数学A、 数学Ⅱ、数学Ⅱ・数学B 理科：総合理科、 物理ⅠA、物理ⅠB、 生物ⅠA、生物ⅠB、 化学ⅠA、化学ⅠB、 地学ⅠA、地学ⅠB	200点 200点 から2科目 各 100点
情報数理科学科	5人	外国語：英語 数学：数学Ⅰ・数学A 数学Ⅱ・数学B 国語：国語Ⅰ(近代以降の文章)、 国語Ⅰ・国語Ⅱ(近代以降の文章) 地理歴史：世界史A、世界史B、 日本史A、日本史B、 地理A、地理B 公民：現代社会、倫理、 政治・経済 理科：総合理科、 物理ⅠA、物理ⅠB、 生物ⅠA、生物ⅠB、 化学ⅠA、化学ⅠB、 地学ⅠA、地学ⅠB	200点 100点 100点 から1科目 100点 100点

(2) 推薦入学試験

・指定校制推薦入試

本学では、英文学科が1991年度から指定校制推薦入試を実施している。英文学科では、優秀な学生を確保することを目的とし、過去の入学試験におけるそれぞれの高校からの本学英文学科への志願者数・合格者数および入学者数に基づいた基準に従い、毎年、指定校を見直し、必要に応じて、指定校の入れ替え作業を加えると共にその年々の指定校を決定している。決定された指定校へは、文書での通知に加えて、教職員ができる限り訪問し推薦入試の趣旨を伝えるように努めている。

推薦指定校1校につき推薦依頼数は1名とし、推薦募集人員は50名である。推薦のあった志願者には、面接を実施し、高校からの調査書、推薦書、志望理由書等を参考にして可否を判定するが、指定校との信頼関係を重んじ、原則として推薦のあった学生を受け入れている。

・公募制推薦入試

公募制推薦入試は、情報数理科学科が1991年度から実施しているものである。この入試は公募制によるもので、1校あたりの被推薦人数に制限はなく、募集人員は20名である。この入試の趣旨は、こつこつ自分のペースで勉強するのが好きだが、短時間のペーパーテストではなかなかその実力を発揮できない“マイペース型”、数学には鋭い関心と人並み以上の能力をもっているが、どうも他教科が苦手な“一芸型”など多様な個性の受験生を選抜することにある。

選考は、推薦書（学校長あるいは指導教員からのもの1通、自己推薦書1通）と調査書（数学と英語の評定平均値）による第一次選考を行ない、合格者に対して事前に送付した2題の数学問題の解法等についての質問を含んだ面接による第二次選考により合格者を決定する。

推薦入試による入学者は、学力に多少ばらつきがあるが、本学への入学を強く希望している学生であるため、入学後の勉学への取り組みはもちろん、サークル活動など学生生活でも意欲的な学生が多い。毎年、募集人員に相当する優秀な学生が入学し、推薦入試は成功しているといえるであろう。

(3) 特別入学試験

本学では、多様な学生を確保するために、一般入学試験のほかに各種特別入学試験を実施している。

・帰国生／在日外国人学校出身者対象の特別入学試験

この入学試験は、単に日本の入学試験制度による不利益を被る可能性の高い帰国子女への便宜を図るだけでなく、多様な異文化体験を持つ学生を受け入れることにより、学生相互の活性化を図ることができるとの期待のもとに実施しているものである。選考方法は、第一次選考が資格審査、第二次選考が学力試験と面接である。この入試で入学した学生の中には、語学の認定試験に合格して、2年次の科目を履修するなど意欲的に勉学に取り組む学生も多く、一般学生にもよい刺激となっている。

学力試験科目および時間は、以下のとおりである。

学 科	試 験 科 目 (時間)
英 文 学 科	小論文 (日本語) (60分)、英語 (80分)、英会話・面接
国際関係学科	日本語による小論文 (60分)、英語 (60分)、現代世界に関する小論文 (60分)、面接
情報数理科学科	英語 (60分)、数学 (120分)、面接

・外国人留学生対象の特別入学試験

留学の目的で日本に入国する女子で、外国において12年間の学校教育課程を修了した者

および修了見込みの者で、日本語能力試験および日本留学試験について各学科指定の試験を受験した者、あるいは受験予定の者を対象にしている。選考方法は、第一次選考が資格審査、第二次選考が学力試験と面接である。

入学後は、留学生の便宜を考えて、カリキュラム上、第二外国語として日本語を履修可能としている。

毎年、志願者は若干名いるが合格する留学生数は少ない。入学した留学生は、勉学に意欲的であるが、経済上の理由からアルバイトとの両立で忙しい生活を送っている。本学には、学内に寮があるので、住居面ではできるだけ便宜を図るようにしている。寮生活においては、異文化交流の面で一般学生に良い影響を与えているようである。

学力試験科目および時間は、以下のとおりである。

学 科	試 験 科 目 (時間)
英 文 学 科	日本語 (小論文) (70 分)、英語 (80 分)、英会話・面接
国際関係学科	日本語 (小論文) (70 分)、英語 (60 分)、現代世界に関する小論文 (60 分)、面接
情報数理科学科	数学 (90 分)、作文 (40 分)、面接

(4) 編入学試験

編入学試験は、英文学科が3年次編入、国際関係学科が原則として2年次編入、情報数理科学科が2年次または3年次編入を若干名募集している。学士入学志願者、短期大学卒業者および卒業見込者、大学2年次以上修了者および修了見込者、高等専門学校卒業者および卒業見込者を対象にしている。編入年次は、専門科目の履修状況等により、変わることもある。応募者は、短期大学卒業者および卒業見込者が最も多い。選考方法は、第一次選考が書類審査、第二次選考が学力試験および面接である。

学力試験科目および時間は、以下のとおりである。

学 科	試 験 科 目 (時間)
英 文 学 科	第2外国語 (フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語のうち1科目選択) (50 分)、英語 (80 分)、小論文 (40 分)、英会話・面接
国際関係学科	第2外国語 (フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語のうち1科目選択) (60 分)、英語 (60 分)、小論文 (60 分)、面接
情報数理科学科	専門科目 (微分積分、線形代数およびプログラミング) (180 分)、英語 (60 分)、面接

入学後は、前校での既修得単位の認定を願い出ることができ、本学の修得単位に相当すると認められた場合は、卒業に必要な単位として認定される。認定される単位数に上限は無く、全ての科目について認定を願い出ることができる。

(5) 社会人入学試験

英文学科で2002年度から実施しており、勉学に意欲的な社会人が、生涯教育の一環とし

て大学への入学を希望するとき、受験勉強がその障壁とならないように、社会人としての貴重な経験およびその中から生れた学習意欲を積極的に評価する選考方法となっている。受験資格としては、入学年の4月1日現在で満23歳以上で大学入学資格を有する意欲ある女性を対象にしている。選考方法は、小論文、英語、面接の総合評価で選考する。

初年度は、志願者10名、合格者3名で全員が入学した。入学者からの感想は、カリキュラムに魅せられ入学し、今は予習復習に大変であるが、期待通り授業が面白く楽しいとのことであった。また、世代の異なる学生との触れ合いを楽しんでいるとのことであった。

(6) 非正規学生の受け入れ

1991年度「大学設置基準」の改定に伴い1993年4月より教職課程履修者を対象に科目等履修生制度が導入された。近年は、日本語教員養成課程履修対象者も毎年一定数受け入れてきている。1997年度からは、単位の修得を必要としない聴講生制度が導入され、科目等履修生との身分の差別化が実現した。

以下に、本学学則のうち、それぞれ科目等履修生、聴講生および交換学生に関する部分を、受け入れ状況を示すデータと共に掲げる。

【科目等履修生】

学則第48条 本学において、単位の修得を目的として特定の授業科目の履修を希望する者があるときは、学生の履修に妨げのない限り、選考の上、科目等履修生として入学を許可することがある。

2. 科目等履修生の入学資格は、本学則第21条各号の一に該当する者とする。ただし、その者の履修の目的等により、特別の要件を付加することがある。
3. 科目等履修生が履修した授業科目の試験に合格したときは、その授業科目の所定の単位を与える。
4. 科目等履修生に関する細則は別に定める。

図表V-1 科目等履修生受け入れ状況

(延べ人数)

学芸学部	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
学生数	22	12	10	12	16
科目数	32	28	24	24	37

【聴講生】

学則第48条の2 本学において一または複数の授業科目の聴講を希望する者があるときは、学生の履修に妨げのない限り、選考の上、聴講生として入学を許可することがある。

2. 聴講生の入学資格は、本学則第21条各号の一に該当する者とする。
3. 聴講生に関する細則は別に定める。

図表V-2 聴講生受け入れ状況

(延べ人数)

学芸学部	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
学生数	7	7	5	8	5
科目数	18	13	8	9	8

【交換学生】

学則第47条 他の大学または短期大学との協定に基づいて本学の授業を履修し単位を修得しようとする者、もしくは本学と協定のある外国の大学の学生で本学の授業科目の履修を希望する者は、当該大学の推薦のもとに、教授会の議を経て交換学生として入学を許可することがある。

2. 交換学生は、履修した授業科目につき試験を受けなければならない。また試験に合格した者には本人の請求により成績証明書を交付する。
3. 交換学生に関する細則は別にこれを定める。

図表 V-3 交換学生受け入れ状況 (人)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
英文学科	2	2	2	2	3
国際関係学科	6	5	6	5	6
情報数理科学科	1	0	0	0	3

問題点と改善の方策

(1) 一般入学試験

- ・ A方式、B方式、C方式それぞれの募集定員の割合の再検討の必要性

A方式は、本学独自の学力試験で、募集定員の割合が最も多いが、多様な学生を確保するため、大学入試センター試験を利用した入試制度を導入したところ、関東以外の地域からの出願数が増えるなど好ましい傾向となっている。実施してから日が浅いため、入学後の成績等の追跡調査データなどまだ不十分であるが、大学入試センター試験は、ほとんどの受験生が受験していることなどから、A・B・C各方式での定員枠の割合についての再検討が望まれる。

- ・ B方式、C方式入試制度のあり方について

B方式の個別学力試験については、地方会場での実施は、国際関係学科、情報数理科学科のみで、英文学科は実施していない。書き取り、聞取問題等で実現が難しいのであるが、できれば3学科が足並みをそろえて実施した方が、受験生には益するところが多い入試制度になると思われる。

C方式については、大学入試センター試験のみの選考であるにもかかわらず、国際関係学科への志願者の場合には、志望理由書を提出させており、可否には関係ないというものの、受験生にとってはかなりの負担のようであり、志願者数の増加が鈍った原因とも考えられる。将来的には学科で、必要性を十分に検討することが望まれる。

(2) 推薦入学試験

英文学科に見られる問題は、過去の入学実績等に基づいて、学科で毎年見直している指定校に選抜を委ねているが、推薦を辞退する高校が増加していることである。推薦条件を

満たす学生は、一般入試でも十分に合格する実力を持っているので、あえて推薦する必要がないというのがその理由である。対策として、本学の卒業生のネットワークを有効に活用した推薦制度の可能性を検討することも一案かもしれない。高校で教鞭をとる多数の卒業生は、本学が送り出そうとする卒業生の理想を体現すると同時に、望まれる学生の特質を明確に受験生に伝えることができるからである。

情報数理科学科では、教員が推薦入学者とその他の学生を比較することができ、学習状況等を見ていると、学業以外にも積極的な参加姿勢が見られるとのことである。一般入試の志願者が減少傾向にあるため、募集人員についての検討が必要かもしれない。2004年度からは、AO入試の導入を検討中であるが、推薦制度との違いを強調するのか、推薦制度をAO入試に含めるのか慎重な検討が望まれる。

国際関係学科では、現在、推薦入学試験を実施していない。近年、この点に関する受験生からの質問も多いこともあり、実施の可能性について検討することが望まれるが、その際、一定の成果を得ている他学科の制度を考慮しながら、学生確保の手段としてのみ用いられることのないよう十分な配慮が必要であろう。

(3) 特別入学試験

在日外国人学校出身者については、一般入学試験の出願資格を得るためには、大学入学資格検定が必要なことから、本学では、独自の基準を設けて特別入学試験を実施しているが、近年、新聞報道にもあるように、その者への大学入学資格の制限を大幅に緩和する傾向にある。本学でも進学相談会で一般入試を受験したいとの希望を受験生から訴えられることもあり、特別扱いをなくす方針を検討する時期と考える。文部科学省の考えを注視していかなければならない。

外国人留学生については、日本で生活するためには経済的な問題が大きいようである。外国人留学生に対しては履修において特別な措置が取られていないことなどもあり、学業とアルバイトの両立が難しく、優秀な学生でありながら、勉強の時間が取れないため、必修科目の単位が取れないというケースもある。本学では、学内に寮があり、住居面ではできるだけ便宜を図るようにしているが、さらに、奨学金制度の充実が望まれる。

特別入学試験については、過去の入試問題を公表していないため、受験生に不安感を与えているようである。他大学では、公表している傾向にあるので、公表に向けて検討することが望まれる。

(4) 編入学試験

編入学の年次は学科によって、また、専門科目の修得状況により異なるが、入学前の単位を認定しても、本学の必修科目の一部は履修する必要があるなど、入学後の勉強はかなり厳しいものとなっている。実力不足の学生が入学し苦勞することのないよう、進学相談会での受験生への情報提供は慎重に行なわなければならない。また、特別入学試験同様、編入学試験の場合も、過去の入試問題を公表していないので、今後、公表に向けて検討することが望まれる。

(5) 社会人入学試験

2002年度からの実施で、まだ、成果は現れていないが、現在は、社会人用の特別な時間割を設けているわけではないため、仕事を持っている社会人は、仕事をやめなければ入学することは不可能である。将来的には、仕事を続けながら勉強できる環境を整えていく必要があるのではないだろうか。また、3学科で足並みをそろえて社会人入学試験が実施できることが望ましい。

B 入学者の受け入れ方針等

現状と評価

入学者の受け入れ方針を明確にするためには、本学の理念、社会に送り出そうとする学生の理想像、さらにこのような理想を実現するために望まれる学生の特質についての言及がなされなければならない。以下では、本学の理念および望まれる学生像を明らかにした上で、そのような望ましい学生の受け入れを可能にするために現在の入試方法がどのように機能しているのかを検討する。

望ましい学生の特質

リベラルアーツとしての本学の教育理念は、人間としてより自由に生きるための学問、学生ひとりひとりの個性と自主性の尊重を標榜するものである。言いかえれば、4年間の学生生活で主体的に自分の可能性を発見し、新しいものを創造していく力、自らを切り開いていく力を培うことにある。

また、多彩な分野での社会的貢献が期待される卒業生の理想像としては、対等の地位に基づく男女の協力によって、様々な地球的課題に対してイニシアティブを発揮していくと同時に、自らをリードしていく女性が挙げられる。具体的な活躍の場として地域社会と国際社会の双方で貢献できる女性を育成することが本学の重要な役割として考えられる。

以上のような教育理念と送り出す学生の理想を実現するために、望まれる受験生の特質は次のとおりである。広い視野からものごとを考えること、自分のやりたいこと・目標としていることを自分で自由にやること、枠にとらわれずに（女性という固定観念にとらわれずに）自分の可能性を試すこと、そして「知識」を学ぶよりも「思考」することを自ら培うことが本学受験生の望ましい特質といえよう。したがって、本学の入試方法は、このような特質を持つ学生を選択するのに適したものでなければならない。

さらに付け加えていうなら、このような特質を備えた学生を受け入れようとする本学の入試方針が、受験生自身によっても大学からの重要なメッセージとして認識されることが重要である。この点に関して、受験生に対し、『入試データブック』のなかで解説・講評が毎年続けられてきたことは十分に評価できるであろう。

a.一般入試

本学の筆記試験においては、いずれの試験科目も論述問題が重視されている。先に述べた本学の教育理念が、学業面で具体化されているとすれば、卒業論文を仕上げる過程のなかに見出されるであろう。自ら問題を設定し、本質の理解に向けて様々な知識を動員しながら思考を繰り返す、そのためには主体的な取り組みを要するからである。本学の入試で論述問題が重視されるのは、表現力、論理的思考の過程、議論の組み立て方の能力を適確に見極めるためであるが、なぜなら、これらの能力・資質は本学の教育理念の実現にとって不可欠な要素だからである。

B方式（大学入試センター試験と本学の個別学力試験）の導入の意図は、大学センター入試を利用する国立併願型の受験生を対象を広げることであった。これを契機に国際関係学科では、現代社会の諸問題に強く関心を抱く学生を受け入れようとする方針の下に、個別学力試験に対して工夫がなされた。今年度（4年目）の追跡調査によると、B方式の受験者はそれ以外の集団と比べて学業成績で差は見られないものの、セミナーでのリーダーシップや独創性という点で顕著であった。したがって、特徴ある学生の選抜機能という点では、一定の効果をもたらしたと言える。英文学科と情報数理科学科においても同様に、それぞれの個別学力試験をとおして、英語と数学の能力において秀でた学生を確保しようとする方針が貫かれている。

これまで国際関係学科と情報数理科学科のB方式入試によって、国内数カ所で個別学力試験を受験することが可能であったが、C方式（大学入試センター試験のみ）の導入は、地方出身者の受け入れをさらに全国各地に広げようと意図するものである。国内の地域的に多様な背景を持つ学生から構成される大学生活は、互いを刺激しながらより広い視野を得ることができる理想の教育環境を形成するとの考えから、このような入試方式が採られるようになった。

b.推薦入試

推薦入試制度は、奉仕の精神・社会貢献への動機を十分に持った学生や、学業以外でも本学の学生集団に対して刺激を与えるような学生を受け入れる機会として重要である。英文学科は、推薦指定校を設け、指定校との信頼関係を重視している。情報数理科学科は、公募制度を採用し、筆記試験では判断できない数学の素質と能力を有する学生の選抜を、面接などを通して、十分な時間を割いて行なっている。いずれも、意欲的、かつ本学に対して強いアイデンティティを抱く学生の受け入れを可能にしていると言えよう。

c.その他の学生の受け入れ

全体の学生数に対する割合は限られているが、編入学希望者、帰国生、在日外国人学校出身者に対しても、面接などを通して本学の望ましい特質を有する学生を受け入れるよう努力がなされている。

外国人留学生の受け入れは、具体的な生活に密着した文化交流、視野の拡大を通してキャンパスの活性化を促すことからいっそうの促進が望まれる。現在、交流協定を通して英語圏以外も含めた海外の大学から毎年一定数の交換留学生を受け入れ、キャンパスの活性化に大きく貢献している。これまで以上に、外国人留学生・在日外国人受験生の受け入れを確保するとともに、途上国、第三世界からの留学生を受け入れられるような体制の整備が望まれる。その意味

では、アフガニスタンへの教育援助の一環として発足した女子大5大学コンソーシアム構想のなかで本学に与えられた機会について、全学で検討することも重要であろう。

外国人留学生と同様、社会人学生の受け入れは、ライフコースを通じて女性の生き方が多様化していくなかでますます重要になる。明確な目的意識、貪欲な学習意欲、社会人としての経験は、世代間交流の活発化を促すとともに、本学の教育理念の実現に不可欠な学生と教員の相互作用の場に、新たな刺激を与えるからである。現在、一般学生とは別の入試方式を導入しているのは、英文学科のみであるが、近い将来に全学的に取り組むべき課題であろう。

障害を持つ学生の受け入れについては、障害の種類を考慮しながら必要に応じた対策が検討されている。

問題点と改善の方策

少子化による高卒受験人口の減少、および社会の変化に伴う受験層の多様化に対応して入試形態の多様化が避けられない傾向のなかで、どのような問題が生じてくるのだろうか。

まず始めに、多様な形態の入試方式をどのように組み合わせていくのか、またどの入試方法に重点を置いていくのかという点が指摘される。言い換えれば、それぞれの入試方法に貫かれている方針の下で求められる学生の特質について、改めてどのような学生を優先して受け入れていくか検討する必要があることを意味する。

ただし、その前提として、それぞれの入試方法によって方針通り望ましい学生が選抜されているかが確認される必要がある。具体的には、入学後の追跡調査を組織的・継続的に行なうことの必要性を指すが、この場合、長年続けられてきた入試方法（A方式）による入学生の集団との対比において、その他の入試方法による学生集団が、本学の望まれる特質を持つ学生の確保に関して、期待通りの成果がもたらされているかどうかを検証されなければならない。B方式入試と推薦入試では一定の成果が見られるようであるが、その他の入試方法についても同様の試みがなされるべきである。

入試の多様化に伴うもう一つの問題は、教員が学生の受け入れと入学後の教育の、いずれにより多くの時間とエネルギーを注ぐべきかという問題である。望まれる大学教育の方針として、「入り口は易しく、出口は厳しく」、すなわち、教員は学生の受け入れよりも入学後の教育に時間とエネルギーを注ぐべきという議論があるが、この点に関しては、個性と自主性を尊重する本学の教育理念に照らし合わせて慎重に対応しなければならないであろう。

C 実績

(1) 志願者・合格者・入学者

次に示すデータは、各種入試の志願者、合格者、入学者の過去5年間の推移を表したものである。

図表V-4 一般入試

	1998			1999			2000		
	A方式	B方式	合計	A方式	B方式	合計	A方式	B方式	合計
志願者数	2,916	1,009	3,925	2,832	1,448	4,280	2,639	1,424	4,063
受験者数	2,861	427	3,288	2,775	631	3,406	2,571	676	3,247
合格者数	1,302	197	1,499	1,197	189	1,386	1,210	275	1,485
入学者数	526	92	618	456	78	534	502	104	606

	2001			2002			
	A方式	B方式	合計	A方式	B方式	C方式	合計
志願者数	2,871	1,457	4,328	3,167	1,670	1,438	6,275
受験者数	2,819	691	3,510	3,123	756	1,438	5,317
合格者数	1,243	203	1,446	1,200	202	271	1,673
入学者数	517	87	604	474	93	21	588

図表V-5 推薦入試

英文学科（指定校制）

年 度	1998	1999	2000	2001	2002
志 願 者	56	52 ▽	46 ▽	50 ▽	52
受 験 者	56	52 ▽	46 ▽	50 ▽	52
合 格 者	56	52 ▽	46 ▽	50 ▽	52
入 学 者	56	52 ▽	46 ▽	50 ▽	52

情報数理科学科（公募制）

年 度	1998	1999	2000	2001	2002
志 願 者	63	47 ▽	55 ▽	43 ▽	36
受 験 者	49	46 ▽	50 ▽	43 ▽	35
合 格 者	25	19 ▽	17 ▽	20 ▽	20
入 学 者	25	19 ▽	17 ▽	20 ▽	20

図表V-6 特別入試

年 度	1998	1999	2000	2001	2002
志 願 者	47	40 ▽	44 ▽	36 ▽	30
受 験 者	40	29 ▽	35 ▽	33 ▽	24
合 格 者	21	15 ▽	14 ▽	20 ▽	12
入 学 者	11	15 ▽	8 ▽	12 ▽	7

図表V-7 編入試

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	28	23	23	17	28
受験者	28	23	23	17	22
合格者	12	9	7	8	10
入学者	11	8	6	6	10

図表V-8 社会人入試

	2002年度
志願者	10
受験者	10
合格者	3
入学者	3

例年、合格者の手続状況により補欠合格者を発表するなどして、調整をしている。2002年度は、C方式の歩留まり率が不明であったが、補欠を発表することなく、定員充足率は、英文学科では1.1、国際関係学科では1.2、情報数理科学科では1.1であった。B方式の歩留まり率が最も高く、初年度のC方式の歩留まり率は、約1割と低かったが、入学者数は、募集人員とほぼ同数となった。

合格最低ラインを引き下げることなく、優秀な学生の入学を望むなか、入試の成績上位者へ奨学金を給付する制度を設けているが、効果については、見直しの時期にきている。2003年度からは、英文学科、国際関係学科に共通な新コースを開設することとなり、受験生の関心を集めていることから分かるように、大学のカリキュラム等での特色を出すことにより、優秀な学生の関心を集めるようにすることがより重要である。各学科において、定員、カリキュラム等の将来構想について検討する委員会を編成するなど、中・長期的なビジョンについて継続的に検討がなされており、必要に応じて全学的な検討をする組織が編成される等の仕組みは確立されている。

(2) 学生収容定員と在籍学生数

2002年、学部在籍学生数は、2,736名、収容定員の1.2倍である。学科別では、英文学科は1.1倍、国際関係学科は1.3倍、情報数理科学科は1.1倍である。

最近3年間、国際関係学科の入学者数がかかなり定員を上回る結果となっている。合格発表の際には、過年度の統計データを基に調整会議、判定会議で検討を行なっているが、入学手続者数傾向を正しく予想することはかなり難しく毎年苦勞している。財政状況の点から、定員をいくらか上回る学生を受け入れることを余儀なくされているが、できる限り最低限に抑え、本学の特色である少人数教育を徹底させなければならない。

(3) 転科

転科に関する学則をあげると、以下のようである。

学則第29条 転科を願い出た者には、事情を考慮した上でこれを許可することがある。毎年9月末に次年度転科希望者の出願を受付け、各学科で選考が行なわれたのち、教授会が適当と認めた者につき許可される。選考は、書類審査、面接および筆記試験であるが、筆記試験は省略されることがある。転科を許可された者は、当該学科に最低2年以上在籍しなければならない。

以下の図表は、過去5年間における英文学科・国際関係学科間での転科生の数を示したものである。

図表V-9 転科生数

(人)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
英文→国際	6	4	2	2	3
国際→英文	0	1	0	2	0
合計	6	5	2	4	3

(4) 退学者

以下の表は、過去3年間の退学者数とその理由を示したものである。

退学理由のうち最も多いのは、進路変更に関するもので、他大学の再受験をめざす者、専門学校へ入学する者などである。1年間休学してから退学する等で、特に1年次生に退学者が多い。最近は、学費が払えないという学生も増えてきており、経済的に困窮した学生に対する新奨学金制度の導入について、来年度実施に向けた検討がなされている。

図表V-10 過去3年の退学者状況

	理由		進路変更	一身上・経済的	健康上	在学満了	死亡	除籍	計
1999	英文学科	1年	5	1					
		2年	2	1					
		3年		1					
		4年	2						
	国際関係学科	1年	6	1					
		2年	3				1		
		3年	1						
		4年	1	3	1				
	情報数理科学科	1年	2	1					
		2年							
		3年							
		4年	1						
	計		23	8	1	0	1	0	33
2000	英文学科	1年	1						
		2年	2	1				1	

		3年			1				
		4年		4					
	国際関係学科	1年	1						
		2年	4	1					
		3年		1					
		4年	3	2				1	
	情報数理科学科	1年	1						
		2年	1						
		3年	1	1					
		4年							
	計		14	10	1	0	0	2	27
2001	英文学科	1年	1						
		2年	2						
		3年	1	1					
		4年	1	2					
	国際関係学科	1年	2						
		2年	4	1					
		3年		1					
		4年	1	4					
	情報数理科学科	1年	2						
		2年	1						
		3年	1						
		4年		1				1	
	計		16	10	0	0	0	1	27

D 入試広報

現状と評価

本学の入試広報は広報会議を中心に教員と職員がそれぞれの役割を分担し、協力して広報活動を展開している。教員は主に模擬授業等を担当し、職員が高校訪問、進学相談会等を担当している。2001年度からは管理職員を中心に進学アドバイザー制度が発足し、入試広報の戦力はそれ以前と比べ飛躍的に伸びている。具体的な広報活動の主なものは次のとおりである。

(1) オープンキャンパス

アンケートや追跡調査の結果、「学内進学相談会の参加者の満足度が非常に高い」、「参加者の志願率が高い」ということがわかった。そこで、学内進学相談会を含むオープンキャンパスの内容を充実させ、その広報活動にも力を入れてきた。新年度のオープンキャンパスについて詳しく案内したガイドブックを4月までに作成し、受験生が本学訪問を早めに計画でき

るようにした。

また、ほぼ年間を通じて通常の授業の一部を高校生に公開しており、年間約 40 名ほどの高校生が 1 人 1 コマから 3 コマの授業を聴講している。

授業公開を除くオープンキャンパスの参加者は 2000 年度 1,274 人、2001 年度 1,651 人、2002 年度 2,089 人となっている。

(2) 学外進学相談会への参加

2001 年度 113 会場、2002 年度は約 120 会場に参加している。全国から志願があるため、北海道から沖縄まで幅広く参加している。

(3) 高校訪問

2001 年度より高校訪問に力を入れている。企画広報課 7 人を含む約 20 人の進学アドバイザーが、本学の志願者のいる高校を中心に訪問している。進学アドバイザー制度のなかった 2000 年度は訪問校が 139 校であったが、制度発足後の 2001 年度は 274 校、2002 年度 320 校訪問と増加している。2002 年度については企画広報課と進学アドバイザーが約半数ずつ訪問している。

(4) 大学案内等パンフレットの作成・配布

大学案内および入試問題を解説したデータブックを各 47,000 部作成し、配布している。

(5) 媒体誌等への出稿

2002 年度は、進学情報誌（13 誌）、新聞（6 紙）、Web による広報（4 件）を、年間を通じて行なっている。

(6) 高校生エッセイ・コンテストの実施

2000 年に創立 100 周年記念事業のひとつとして始め、その後も継続して実施している。これは短い英文を読んで、手紙形式でエッセイを書く（英語あるいは日本語）というものである。高校の英語担当の教員に英語教材のひとつとして、取り上げてもらうようお願いしている。入試広報ではないが、これにより高校生に「英語の津田塾」のイメージを伝えることができるのではないかと、また、高校教育にも資するのではないかと考えている。

2000 年度「津田梅子に手紙を書こう」応募者 189 人（83 校）

2001 年度「キング牧師に手紙を書こう」応募者 116 人（32 校）

2002 年度「ジョン・レノンに手紙を書こう」応募者 180 人（69 校）

(7) 卒業生の高校教員への広報

本学では高校の英語および数学の教員になっている卒業生が多いため、大学広報に協力してもらうようお願いしている。毎年 6 月新年度の大学ガイドブックほか大学に関する情報をまとめて送付し、卒業生教員に常に最新の大学の姿を知ってもらうよう努力している。

また、2002 年度にはホームカミングデーに英語教育に関するシンポジウムを開催した。卒業生を対象に企画したものだが、本学への志願高校、および近隣の小、中、高校にも案内したところ、反響があり、英語教授法に悩んでいる現職教員の姿が見えてきた。大学としてこうしたニーズに応えることも間接的に高校側に本学の存在をクローズアップさせることになると思われる。

(8) 在学生の高校における広報

4 年生の約 30%が母校を中心に教育実習を行なっているが、実習生による大学説明会を

開催する高校が増えている。また、実習生が生徒から進学相談を受ける機会も多い。そこで、大学では教育実習生に対し積極的に大学説明をしてくれるよう資料等を渡して依頼している。

(9) ホームページの公開

入試広報としては、ホームページに入試情報を詳細に掲載している。2002 年度入試よりホームページ上で合格発表も行なっている（ただし、正式の発表は学内掲示）。2002 年 9 月には月間アクセス数が 10,000 件を超えている。経費があまりかからず、即時に詳細に広報できるホームページは本学に適した広報手段なので今後も積極的に活用したい。

問題点と改善の方策

本学の場合、文系 2 学科、理系 1 学科であるが、文系の知名度が高く、理系の情報数理科学科の存在が十分高校生に知られていない状況である。「英語なら津田塾」「国際的に活躍する女性」といった英文学科や国際関係学科のイメージに匹敵する情報数理科学科のイメージを打ち出せないでいる。今後の課題である。

近年高校の進路指導は、大学そのものを体験させる方向に向かっている、学問分野別説明会や模擬授業等、教員でないと対応できない依頼が増え問題になってきている。本学の場合特に、国際関係学科の模擬授業依頼が多いが、少ない専任教員ですべての要望にこたえることは困難である。高校側の進路指導への協力依頼に対しどのように対応していくか今後の課題である。

2. 大学院における学生の受け入れ

A 大学院入試

現状と評価

文学研究科

修士課程の定員は10人、後期博士課程の定員は3人であるが、近年は内部定員として、修士課程は15人、後期博士課程は5人としている。これまで多くは本学の新卒生であったが、近年、他大学からの入学者が増加している。また、元社会人、家庭を持つ人など、さまざまな経歴の院生が共に学んでいる。2003年度入試から、現役の中学・高校教員対象の入試を実施している。これは、大学院修学休業制度等を利用する現職中学・高校教員を対象に実務経験を考慮し、一部試験を免除した入試である。

試験科目・時間は以下のとおりである。

修士課程

外国語（フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語から1科目選択）（50分）

なお、2004年度入試より、選択できる外国語の中にロシア語および朝鮮語が加わることになっている。

専門科目（和文英訳・英文和訳（70分）、
専門（共通問題・小論文）（100分））

面接

* 外国人留学生について

上記4ヶ国語のいずれかを母語とする留学生の場合。

- ① 母国の大学出身者については、外国語試験は免除する。ただし、これに代わるものとして第2次入学手続期限までに日本語能力試験1級に合格し、認定書を提出しなければならない。
- ② 日本の大学出身者は外国語試験の受験科目として母語を選択することができる。

後期博士課程

英文和訳、和文英訳（90分）

口述試験

国際関係学研究科

修士課程の定員は10人、後期博士課程の定員は3人である。近年、修士課程入学者数が減少傾向にあるため、修士課程については、内容の異なる試験を10月と2月の2回行なっている。これは、近年、国立大学などが大学院枠を拡大し、研究科ごとに数十名単位で合格者を受け入れようとする傾向に対して、本研究科では、少数ながらも特徴のある大学院生の入学を確保しようとする意図のもとに実施されている。すなわち、10月に2カ国語の試験を行なうのは、一定の言語修得を前提とした地域研究を重点的に志向する受験生

の選考を中心に行なうためである。同時に、合格者が入学までの期間を大学院に必要な準備に費やすことが可能となるよう想定している。2月に外国語1科目の試験を行なうのは、特定の地域よりも課題を中心に研究に取り組もうとする受験生の選考を試みるため、したがって提出論文の内容と完成度が相対的に重視される。このように、二度の異なる入試は、研究科専攻の性格上、研究テーマの多様化が不可避であることを受け入れた上で、受験生の力を適確に見極めると同時に、一定の枠を確保しようとするために考え抜かれた方策といえる。

しかし、入学者数は、定員を下回った状況が続いている。問題を本研究科の入試制度に限定してみると、例えば入試出願時に論文を提出することになっているが、とくに10月入試の場合、出願時期との関係で完成度の高いものを提出するのは難しいようである。研究科では、この状況を深刻に受け止め、入試の期日や入試の内容として卒業論文の提出に代わり研究計画書を重視する方向など、現在入試制度について検討中である。

試験科目・時間は以下のとおりである。

修士課程（10月期）

外国語（英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語から2科目選択）（140分）

提出論文に基づく面接

修士課程（2月期）

外国語（英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語から1科目選択）（90分）

提出論文に基づく面接

後期博士課程

提出論文による面接

理学研究科

修士課程の定員は5人、後期博士課程の定員は3人であるが、近年は、内部定員として、修士課程は10人としている。1991年度からは、3年生から直接大学院に入学できる飛び級制度を設け、現在までに2人入学している。学部の成績、学習状況等に一定の基準を設け、その基準に達したものを候補者とし、面接等を行ない合格者を決定している。

また、優れた大学院生を確保するために、また、進学か就職かの学生の選択を容易にするために、内部推薦制度も実施している。3年次までの数学の成績が優秀で、かつ外国語科目の単位を規定以上修得している者の中から、前期中に内定者を決定し学生に内示する。大学院進学を希望する学生は、9月の一般入学試験に出願し、筆記試験は免除され、面接を受け合否が決定される。定員を下回った状況が続いており、他大学からの志願者も非常に少ない。本学の入学試験の時期は、他大学に比して遅いといわれており、時期的な面も含めた入試制度の検討が必要であろう。

1998年度から、社会人入試を9月と2月の年2回行なっており、毎年、1～2名が入学している。選考方法は、専門科目の筆記試験が免除され、英語の筆記試験と提出された小

論文に基づいた口頭試問により、合否を決定する。入学後は、社会人用のカリキュラムが特別に用意されているわけではないため、研究指導の教員が学生と時間を調整する等により指導が行なわれている。また、文学研究科と同様に、2003年度入試から、現役の中学・高校教員対象の入試を実施している。

試験科目・時間は以下のとおりである。

修士課程

基礎（微積分、線形代数、プログラミングから2科目選択）（180分）

専門（数学または情報科学）（180分）

英語（60分）

面接

修士課程（社会人対象）

英語（60分）

口頭試問

（提出した小論文を基に、数学または情報科学についての基礎的質問をも含む）

後期博士課程

修士論文および専攻分野に関する口頭試問

非正規学生の受け入れ

非正規学生を受け入れるための制度としては、「科目等履修生」、「聴講生」および「研究生」の制度がある。以下に、それぞれの制度について規定した大学院学則および受け入れ学生数を示す表を掲げる。

【科目等履修生】

- 大学院学則第45条 各研究科において、一又は複数の授業科目の履修を希望する者があるときは、正規の学生の教育に支障がない範囲において、選考の上、科目等履修生として入学を許可することがある。
2. 科目等履修生の入学資格は、学士もしくは修士の学位を有する者又は各研究科がこれらと同等以上の学力があると認めた者とする。
 3. 科目等履修生が履修した授業科目の試験に合格したときは、その授業科目の所定の単位を与える。

文学研究科においては、教育研究上有益と認めるときは、入学前に大学院で科目等履修生制度により修得した単位を、入学後に本大学院文学研究科で修得したものとみなし、単位を認定することがある。その場合、修士課程においては8単位、後期博士課程においては4単位を上限としている。

図表 V-11 大学院における科目等履修生受け入れ状況 (延べ人数)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
学生数	1	4	2	5	7
科目数	2	3	2	7	8

【聴講生】

大学院学則第45条の2 各研究科において、特定の授業科目の聴講を希望する者があるときは、正規の学生の教育に支障がない範囲において、選考の上、聴講生として入学を許可することがある。

2. 聴講生の入学資格は、学士もしくは修士の学位を有する者又は本大学院がこれらと同等以上の学力があると認めた者とする。

図表 V-12 大学院における聴講生受け入れ状況 (延べ人数)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
学生数	4	4	5	5	6
科目数	4	7	6	7	9

【研究生】

大学院学則第48条 各研究科において、特定課題の研究を希望する者があるときは、正規の学生の教育に支障がない範囲において、選考の上、研究生として入学を許可することがある。

研究生の受け入れ方針は、現在各研究科に委ねられている。国際関係学研究科においては、主に外国人学生の本学大学院受験対策のために、研究生としての受け入れを行なっているが、文学研究科においては、外国人学生を対象とする大学院受験指導のための特別な受け入れは行なっていない。

外国人学生の場合、在留資格取得を目的として、研究生を希望してくるケースが従来非常に多かったが、研究指導教員との面接や書類審査など研究科毎の工夫により、現在は本来の主旨・目的に沿う形態の学生の受け入れとなっている。今後は、企業や研究所等からの派遣による職業従事者を積極的に受け入れることにより、研究科の研究活動がより活性化することが期待される。

図表 V-13 2002年度 研究生数

研究科	人数
文学研究科	2人
国際関係学研究科	2人
理学研究科	0人

B 入学者の受け入れ方針等

現状と評価

本大学院における入学者の受け入れ方針は、本学の教育理念に基づいており、各研究科共、学際的な視野を養いつつ、個性ある研究を志向する研究者を養成することをねらいとしている。本学学部からの進学者は、本学の教育理念による4年間の学生生活で主体的に自分の可能性を発見し、新しいものを創造していく力、自らを切り開いていく力が培われており、女性ならではの視点も活かしながら継続して高度な専門研究を深めていく意欲のある学生集団である。さらに加えて、実務経験を持ち、自分の物の見方を鍛え直し、いっそうの活躍に役立てようと考えている社会人や家庭を持つ人など、さまざまな経歴、年齢層の学生を正規学生としてだけでなく、科目等履修生、聴講生、研究生としても受け入れている。それら異なる層の学生たちは互いに切磋琢磨し合いながら研究に励み、各研究科とも理想的な研究環境をかもし出している。修了者は、主に、大学・高校教員、研究者、技術者などとして、研究科のねらい通り多方面で活躍している。2003年度からは、現職中学・高校教員を対象にした入試を導入し、教鞭をとる卒業生を視野に入れた社会人の入学を期待している。また、私費留学生や文部科学省からの国費留学生を受け入れるなど外国人留学生の受け入れも積極的に行なっている。

C 実績

(1) 志願者・合格者・入学者

以下の表は、各研究科の志願者、合格者、入学者の過去5年間の推移を示している。

図表 V-14 文学研究科(修士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	34(18)	19(6)	19(7)	31(10)	19(8)
合格者	15(5)	14(5)	14(4)	17(4)	13(3)
入学者	12(4)	11(3)	12(2)	13(3)	12(2)

()内の数字は本学以外の学生・内数

図表 V-15 文学研究科(後期博士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	12(9)	9(4)	13(7)	12(6)	13(3)
合格者	6(4)	6(1)	9(3)	8(4)	8(1)
入学者	6(4)	6(1)	6(2)	8(4)	8(1)

()内の数字は本学以外の学生・内数

図表 V-16 国際関係学研究所(修士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	23(16)	22(16)	23(13)	13(9)	9(5)
合格者	10(7)	6(3)	7(2)	10(7)	4(1)
入学者	10(7)	5(3)	7(2)	4(2)	2(1)

()内の数字は本学以外の学生・内数

図表 V-17 国際関係学研究所(後期博士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	2(1)	8(3)	9(3)	5(1)	6(1)
合格者	1(0)	1(0)	5(2)	4(0)	4(0)
入学者	1(0)	1(0)	5(2)	4(0)	4(0)

()内の数字は本学以外の学生・内数

図表 V-18 理学研究所(修士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	9(0)	9(1)	9(0)	8(1)	7(0)
合格者	7(0)	7(0)	8(0)	6(1)	6(0)
入学者	7(0)	5(0)	6(0)	5(0)	6(0)

()内の数字は本学以外の学生・内数

図表 V-19 理学研究所(後期博士課程)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
志願者	2(0)	1(0)	1(1)	1(0)	1(0)
合格者	2(0)	1(0)	0	1(0)	1(0)
入学者	2(0)	1(0)	0	1(0)	1(0)

()内の数字は本学以外の学生・内数

文学・国際関係学研究所では、他大学出身者が志願者の約半数を占める年もあり、本大学院への関心の高さがうかがえるが、筆記試験の得点は言うまでもなく、入学してからの研究計画が明確であることが強く求められるため、合格することはかなり難しい状況である。

図表 V-20 2002年度入学定員の充足状況

研究科	課程	定員数	入学者数	充足率
文学研究科	修士課程	10	12	1.20
	後期博士課程	3	8	2.67
国際関係学研究所	修士課程	10	2	0.20
	後期博士課程	3	4	1.33
理学研究科	修士課程	5	8	1.60
	後期博士課程	3	1	0.33
研究科全体		34人	35人	1.03

図表V-21 2002年度学生定員の充足状況

研究科	課程	定員数	在籍者数	充足率
文学研究科	修士課程	20	28	1.45
	後期博士課程	9	32	3.56
国際関係学研究科	修士課程	20	10	0.50
	後期博士課程	9	18	2.00
理学研究科	修士課程	10	15	1.50
	後期博士課程	9	2	0.22
研究科全体		87人	105人	1.21